

## はじめに

いま、大学は二一世紀生まれの世代を受け入れ始めています。一方、大学教員といえは二〇世紀、その多くは昭和世代です。二つの世代に共通するのは、ともに今世紀、そして令和の時代を生き、学問を行っているという点でしょうか。さて、その令和は、初代の大化から数えて平成に次ぐ二四八代目の新しい元号です。日本の元号は、ここに至って初めて、従来の中国の古典（四書五経）ではなく、日本の古典（『万葉集』）を出典としました。この意味でも令和は新しい元号といえます。すなわち、「新しい元号」というときの「新しい」という語には、「それより前（平成）の後。その次」という意味と、「それ（平成）まで見られなかった、従来とは質的に異なっている」という意味を認めることができます。

こうして新しい令和の時代に入りたいま、学校教育においては平成に告示された新しい学習指導要領が次年度以降、小学校から順次、実施されていきます。その中で、国語科は教科の目標を「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を（略）育成することを目指す」（小学校・中学校）としています。また、古典についてみると、引き続き「我が国の言語文化に関する事項」の中で日本の伝統的な言語文化として位置付けています。このため、小学校・中学校での古典教育では、これまでと同様に昔話や神話などを聞くことから始め、文語調の文章や古典の音読・朗読・暗唱、歴史的背景に注意して読むことなどを通

して古典の世界に親しむこと、そして、ことわざ・慣用句・故事成語を知り、古典の解説文、現代語訳や語注付きの古典を読んで先人のものの見方・考え方・感じ方について知ることが指導されていくことになります。そのような時宜を得て私たちはいま、本書『次世代に伝えたい新しい古典——「令和」の言語文化の享受と継承に向けて』を世に送り出すことになりました。そこで次に、この書名の意味に関して少し述べておきたいと思います。

そもそも「新しい」という語は、古語の「あらたし〈新〉」と「あたらし〈可惜〉」に由来する形容詞です。歴史的に見ると、上代語の「あらたし」が音変化して平安時代以降に「あたらし」へと語形変化しました。こうして生まれた「あたらし」という語は、もとの「あらたし〈新〉」の意味に加えて「あたらし〈可惜〉」に由来する意味、つまり、対象の中に〈すばらしさ〉が認められる状態をも表すようになりました。対象とは、本書では「古典」を指します。その「古典」の「典」という漢字は、「刀」<sup>キ</sup>すなわち机の上に「冊」すなわち書冊・書物を高く載せたさまを表す会意文字です。また、中国では「典常也。経也。」と考えられており、「古典」は古くて、しかも恒常性、永続性を持つ書物を指します。すると、「新しい」と「古典」が連結した「新しい古典」とは、古くても、それ以前には見られなかった、しかもその中に〈すばらしさ〉を見出すことができる書物、古今を貫いて変わらない価値を有する書物、さらに次代においても価値を有する書物ということになります。

では、具体的には、どの書物、こういった作品が「新しい古典」なのでしょうか。それらには、いったいどのような価値を見出すことができるのでしょうか。この問いに「次世代に伝えたい」という観点を添えて、新進気鋭の研究者から熟練の域に至るまでの研究者、教育者の方々に執筆をお願いしました。その中でも目を引くのは、

『万葉集』の語「隠沼」の訓読について論じたアメリカ人の万葉研究者・ローレン・ウォーラー氏、明治の民権思想の啓蒙書『民権自由論』の表現について論じたベルギー人の日本文化研究者・ヨース・ジョエル氏の論考です。両氏にとっては外国語である日本語で書かれたそれぞれの古典と正面から向き合い、その価値が日本の社会、そして日本人の中に内面化される様相を描出しています。両氏の存在はまた、これまでの日本の「古典」をこれからの「新しい古典」として創造し、継承していく一つの姿として銘記されるものといえます。

さて、以下に本書の構成と論考について簡単な説明をしておきます。

I 「古典文学」は、上代の『古事記』（七二二年）から近代の『土』（一九一〇年）までを対象とする一六の論考と古典漢文の視点による一つの論考、計一七の論考で構成しました。最初の論考では、「新しい古典」の意味を吟味した上で、正統派古典である『古事記』を対象に文字列を当形に即して読み解くことの必要を説いています。これに続く論考では、馴染みがある作品に対してはLGBTをはじめとする多様な現代的な視点から独自の照射が行われています。一方、馴染みが薄いと思われる作品に対してはその照射に加えて作品の内容や価値について懇切な分析が行われています。最後の論考では、日本の古典、我が国の伝統的な言語文化の理解にとって不可欠な古典漢文の素養を掘り起こす中で、次世代にそれが継承されていくことへの期待を述べています。

II 「国語教育」は、日本の学校教育における古典の位置付けとその学習指導に関する四つの論考で構成しました。そこでは、古典教材として小学校の昔話（かぐや姫）から中学校の『竹取物語』、高等学校では『更級日記』『門出』、『伊勢物語』『筒井筒』が挙げられています。特に中学校の古典教育では、小学校での昔話・神話な

どの学習と関連付けて導入し、高等学校での古典学習へ接続するという系統性の視点に基づく指導が重要になります。一方、高等学校では言語活動を重視した主体的・対話的な古典授業への転換が喫緊の課題となっています。

Ⅲ「日本文化」は、新しい古典が成立する基盤ともなる日本の社会に根付いている文化という視点による三つの論考で構成しました。ここでは、芥川龍之介によって再発見された『今昔物語集』の中の民衆世界、また、植木枝盛のリベラルな『民権自由論』によって近代の民衆に啓かれた政治思想ひび、そして昔語りや古典を聴くことで新たに獲得される学校社会での言語コミュニケーション能力について解き明かしています。

こうしてみると、いずれの論考においても、そこにはそれぞれの執筆者が取り上げた書物や作品、対象の中に捉えた発見とでもいえるべきものを窺うことができます。それらは、必ずしもこれまでに見られなかった、まったく初めての「新たな発見（新発見）」とは限りませんが、少なくとも対象を再分析する中でもたらされた対象の内部（または執筆者の内部）における「改めての発見（再発見・再認識）」であるということが出来ます。本書を通じて、読者がそういった発見に触れることで、これまで知らなかった新たな古典の世界に興味・関心あるいは問題意識を持ち、本書に登場した古典を手にとることがあるとすれば、編者としてこの上ない幸いです。また、読者自身による「新しい古典」の探索、そこにすばらしい出会いが訪れることを願います。というのも、そのことが古典なるものを古典たるものとして次世代に受け継いでいく契機になると信じるからです。

令和二年三月吉日

井 上 次 夫